

新岡垣風土記

第428回

山田村神社萬書上帳控①

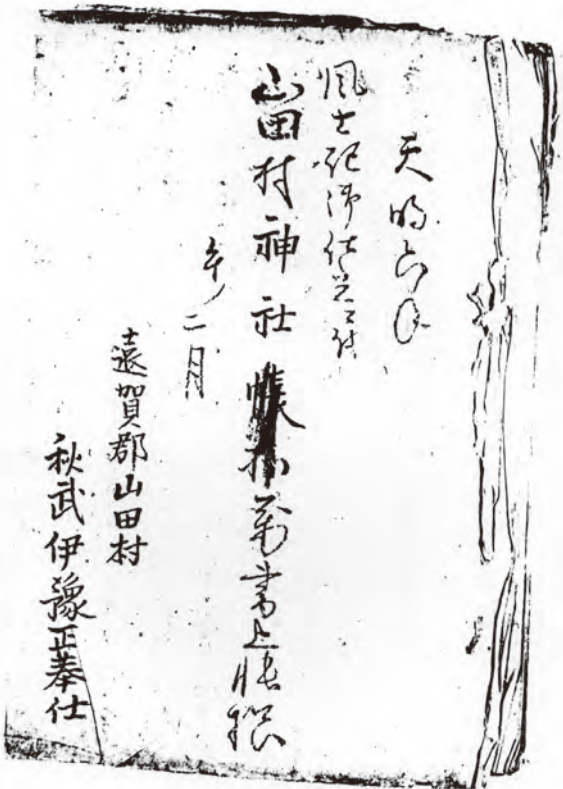
岡垣歴史文化研究会 石田 健次

宮ノ尾文書の中に天明6(1786)年2月付けの「山田村神社萬書上帳控」がある。これは、地誌の編纂のために提出されたものを控えとして残されたものである。

江戸時代の筑前における地誌の代表的なものとして、「筑前国統風

土記」「本編」・「附録」・「拾遺」の3つがある。「本編」は貝原益軒の編纂によるもので、元禄16(1703)年に藩主に献上している。

地誌の編纂は各藩で行われたが、これは、地誌の編纂が藩の治政を権威付けするには有効である



▲宮ノ尾文書(山田村 秋武重義氏所蔵)

ためである。このような状況の中で、福岡藩士の加藤一純(号は虞山)は、鷹取周成を助手として、『本編』を補うために天明5(1785)年から『附録』の編纂に着手した。加藤一純は藩内の村々を綿密に実地調査し、寛政5(1793)年4月に40巻を藩に上進した。

この「山田村神社萬書上帳控」は、表紙に「風土記御仕立二付」と書かれており、「筑前国統風土記附録」の編纂のために作成された。文書の奥書には、天明6(1786)年2月の日付と山田村庄屋及び組頭3名の責任者の名前が書かれている。この書上帳には次のような加筆がされている。

「此帳面寛政式年戌ノ四月加藤虞山様御出郡、虫生津村御泊りの節、村々庄屋中御許出二而御引合被遊候、其節庄屋藤十郎代二組頭喜十郎方帳面もたせ指出候也」

これによると、寛政2(1790)年4月に、加藤一純が虫生津村(現在の遠賀町大字虫生津)に宿泊した際に、この書上帳を庄屋藤十郎に代わって組頭の喜十郎に持たせて差し出したのである。

この書上帳は、『附録』の編纂が開始された翌年には既に作成済みであったが、加藤一純がこれを受け取るまでに4年の歳月が流れている。

藩に上進された『附録』では知り得ないことが、この書上帳に詳細に記録されている。江戸時代にお

ける山田村の神社の詳細を知ることが出来る資料である。

【山田村神社萬書上帳】

- 氏森宮 神殿は、一間四面の大きさである。拝殿は、横が二間半、長さ一間一尺で、渡殿は長さ一間半、横一間半の大きさである。
 - 氏森宮神田 藩主黒田長政公の寄付と伝えられている三畝の神田がある。
 - 氏森宮鳥居 山田村大庄屋秋武五八郎が宝永4(1707)年8月に建立したもので、高さ一丈、廻り四尺八寸の大きさである。
 - 氏森宮石灯笼 山田村吉田善兵衛が正徳2(1712)年5月に一対を寄進した(高さ六尺、廻り二尺六寸)。
 - 山田村秋武五平、万三郎が正徳2年11月に一対を寄進した(高さ六尺、廻り二尺六寸)。
 - 福岡藩家老黒田美作が明和5(1768)年6月に一対を寄進したと伝えられている(高さ七尺、廻り一尺五寸)。
 - 宗像郡赤間町松尾善十郎、同太左衛門が安永3(1774)年正月に一対を寄進した(高さ六尺、廻り六寸四方)。
- (参考)
- 一間 約1・8メートル
 - 一尺 約30センチメートル
 - 一寸 約3センチメートル
 - 一丈 約3メートル

つづく